

文部科学省 GP 採択プログラム
「マイライフ・マイライブラリー」
自己点検・評価報告書

2010年8月

東京女子大学 自己点検・評価委員会

はじめに

大学教育の内部質保証、そのシステムの確立が求められるようになりました。

大学は自らの教育研究の質を常に問い直し、自らの状況を点検・評価し、それを基に将来を展望してより良い教育と研究の姿を求めて努力する必要があります。

東京女子大学では、毎年テーマを決めて自己点検・評価を行っております。大学評議会下に位置付けられている自己点検・評価委員会が、各組織と連携し、全学的見地から自己点検・評価を行い、本委員会から当該の委員会・部署等に改善すべき点があれば指摘し、適切な方向付けを行うようにしております。

2010年度は、文部科学省GP採択プログラム「マイライフ・マイライブラリー」について自己点検・評価を行いました。自己点検・評価の過程で、本プログラム導入前のデータが不足し、導入後との比較、効果の検証が十分に行えなかったため、改善策が具体的に提示できていない等の課題が残りました。この自己点検・評価の結果をもとに、その客観性を担保し、本プログラムをより良いものへと発展させていくため外部評価を実施いたしました。外部評価は、外部評価委員長逸村裕氏（筑波大学大学院 図書館情報メディア研究科教授）、同委員加藤秀爾氏（淑徳与野中学・高等学校高等部教頭）、成島由美氏（㈱ベネッセコーポレーション執行役員 教育事業本部小学生商品開発部部長）で構成する外部評価委員会を設置し、昨年受けた（財）大学基準協会の大学評価（認証評価）のプロセスを参考に進めました。今後も恒常的に何らかの外部評価を導入していく所存です。

ここに、自己点検・評価報告書、別掲で外部評価結果報告書を掲載いたしますので、ご覧いただけましたら幸いです。

最後に、ご多用中のところ実地視察等お時間をお取りくださるとともに短期間で報告書をまとめていただいた外部評価委員会の各氏に深く御礼申し上げます。

自己点検・評価委員長

（学 長） 眞田 雅子

文部科学省G P採択プログラム「マイライフ・マイライブラリー」自己点検・評価報告書
目 次

	頁
序 章	
1. 「マイライフ・マイライブラリー」発足の背景	1
2. 「マイライフ・マイライブラリー運営委員会」の組織と活動	2
第 章 滞在型図書館	
【実施状況】	
1. フロア構成および新スペースの機能	5
2. 利用状況	6
【点検・評価、長所・問題点】	
1. フロア構成および新スペースの機能	8
2. 利用状況	9
【将来の改善に向けた方策】	12
第 章 学生協働サポート体制	
【実施状況】	
1. 全体	13
2. 各アシスタントの状況	14
3. 学生のキャリア構築力と社会人基礎力の育成支援	18
【点検・評価、長所・問題点】	
1. 一般学生への学習支援	18
2. 学生のキャリア構築力と社会人基礎力の育成支援	21
【将来の改善に向けた方策】	21
第 章 本プログラムによる図書館サービスの多様化とその効果	
【実施状況】	
1. 学習支援プログラム	23
2. コンピュータによる自習システム	25
3. 学内組織との連携	26
4. 初年次学習支援	27
5. 本プログラムの位置づけの明確化および大学全体の教育への効果	28
【点検・評価、長所・問題点】	
1. 学習支援プログラム	28
2. コンピュータによる自習システム	29
3. 学内組織との連携	30
4. 初年次学習支援	30
5. 本プログラムの位置づけの明確化および大学全体の教育への効果	31

【将来の改善に向けた方策】	3 2
---------------	-----

第 章 学外への公表・普及

【実施状況】

1. 他大学等からの見学者	3 3
2. 学外での事例報告（講演会等）	3 3
3. 雑誌への掲載（依頼原稿）	3 3
4. 報道発表・新聞記事での紹介	3 3
5. 研究者による報告書発表等での紹介	3 4

【点検・評価、長所・問題点】	3 4
----------------	-----

【将来の改善に向けた方策】	3 5
---------------	-----

評価資料一覧	3 7
---------------	-----

序章

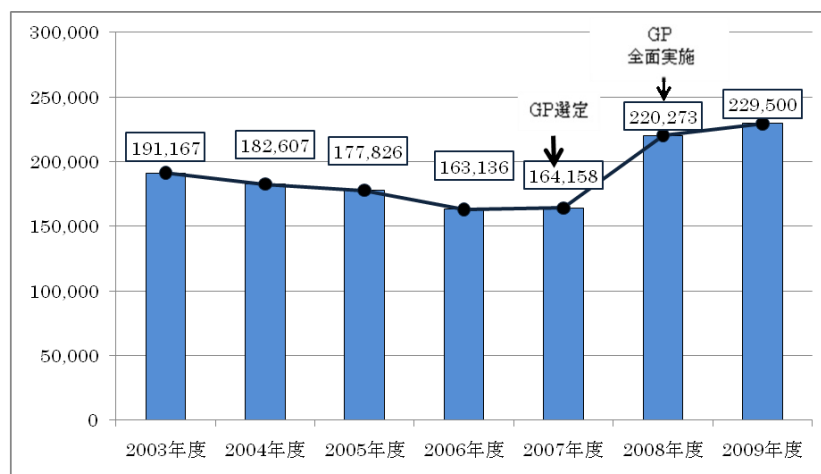
本学は、学生支援GP選定年度の2007年11月から「マイライフ・マイライブラリー」の事業を実施してきた。本年度（2010年度）を以って補助事業期間は終了する。そこで、これまでの事業実施状況を振り返り、2011年度から大学の経常的な事業として継続・発展させていくため自己点検・評価を行う。

1. 「マイライフ・マイライブラリー」発足の背景

(1) 近年の図書館の利用者減とその改善への模索

他大学と同様に本学でも近年の活字離れの傾向から図書館の利用者が減少し続けていた。図1のとおり、2005年度には、開館時間を夜10時までに延長したが、入館者数は減少し、従来のサービスの展開だけでは活路を見出せずにはいた。

図1 入館者数推移



1997年度のキャンパス統合を機に図書館機能も統合し、重複図書の整理を行った。そして、2002年度には図書館内の事務組織を整理した結果、事務室に空きスペースが生じた。その空きスペースを有効利用し利用者増加をはかる方策を図書館委員会で検討し、2006年7月に電子化の促進等をコンセプトとする図書館1階の改修計画案を策定した。

(2) 文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（略称：学生支援GP）」への応募・選定

(1)で述べた図書館からの1階改修計画案について、その後、学内で協議に付され、大学経常費の年次計画によるフロア改修を行うという了解が得られた。

2007年6月に文部科学省による学生支援GPの公募が開始され、学内での協議を経て、図書館が計画中のプログラムを申請することとした。

申請にあたっては、「学生支援」の立場から図書館の果たす役割を問い直し、学生一人ひとりの潜在的な生きる力を引き出し（マイライフ支援）、活気に満ちた知的探求の

拠点となる「滞在型図書館」（マイライブラリー）に発展させることを、このプログラムの目的とした。

「滞在型図書館」（マイライブラリー）とは、従来の学習や研究に加えてグループ学習や学生同士の交流など様々な利用目的を想定した空間を備え、長時間滞在を可能にした図書館というコンセプトを表すものである。図書館を「空き時間に長時間滞在し、読書、試験勉強、グループ学習、レポート・論文作成(情報検索、資料閲覧、執筆)等の総合的学習活動を行う場」とし、学生にとっての大学生活の拠点として明確に位置付けた。

また、施設などハード面の整備と連動した形で、学習支援のための学生アシスタントによる学生協働サポート体制を整備した。学内諸組織との連携企画による各種セミナー等の開催を実施するなどソフト面の整備も行った。こうした改革を実施することで、学生が図書館利用をより有効なものとし、自らのキャリア構築力を養うことを目指した。

以上のように、「マイライフ・マイライブラリー」は、従来の図書館としての機能を向上させつつ、多様化する学生のニーズにきめ細かく対応し、学生の社会的成長を支援するプログラムとして構築された。

2. 「マイライフ・マイライブラリー運営委員会」の組織と活動

2007年9月7日に学生支援GPに選定されたことを受け、直ちにプログラムの運営組織の検討に入り、9月26日に図書館委員会の下部委員会として「マイライフ・マイライブラリー運営委員会（以下「運営委員会」という）」を新設した。

運営委員会構成

委員長 = 図書館長

委員 = キャリア・センター長、文理学部学生委員長、現代文化学部学生委員長、情報処理センター長、文理学部日本文学科教育職員、現代文化学部言語文化学科教育職員、教育学・博物館学研究室教育職員（以上、教育職員）
教育研究支援部長、キャリア・センター課長、学生生活課長、情報メディア課長、図書館課長、（陪席：学務課長）

2007年度の運営委員会で、全学連携による学生支援の進め方、日本語基礎能力養成のための初年次学習支援プログラムの進め方、図書館改修の仕様について、協議し、活動を開始した。会議の開催は、2007年度と2008年度は各2回、2009年度は3回、2010年度は前期で4回となっているが、日常的な協議は、メーリングリストを利用した協議により、迅速に対応している。

運営委員会での検討事項は、主として、当年度の活動実績の確認および次年度の活動方針・内容の検討である。特に2008年度には、運営委員会内の「学習支援作業部会」が2009年度からの新学部学科体制に向けての図書館による学習支援プログラムの見直しを行った（「第 章 本プログラムによる図書館サービスの多様化とその効果」参照）。また、プログラムの効果を測定するために、以下のようなアンケート調査を実施してきた。

- 2008 年度「マイライフ・マイライブラリー」アンケート（資料 5 参照）
 実施時期：2009 年 1 月
 実施方法： 図書館委員会委員およびマイライフ・マイライブラリー運営委員会委員が担当する授業の受講者に実施。
 図書館内で利用者にアンケート用紙を配布し、ボックスに回収。
 回収数： 650 部 128 部 計 778 部
- 2009 年度「マイライフ・マイライブラリー」アンケート（資料 6 参照）
 実施時期：2010 年 1 月
 実施方法： 図書館委員会委員およびマイライフ・マイライブラリー運営委員会委員が担当する授業の受講者に実施。
 図書館内で利用者にアンケート用紙を配布し、ボックスに回収。
 回収数： 799 部 209 部 計 1,008 部
- 2010 年度「マイライフ・マイライブラリー」自己点検・評価アンケート（資料 7 参照）
 実施時期：2010 年 6 月実施
 実施方法：利用者（学生）の実態を把握することを主眼として、以下のように館内での実施とした。
 2010 年 6 月 2 日（水）、3 日（木）、4 日（金）、7 日（月）、8 日（火）の平日 5 日間に、入館者に手渡しで計 2,180 部を配布。
 回収数：ボックスで回収した数：675 部 回収率 = 31.0%
- 2010 年度「マイライフ・マイライブラリー」教員アンケート（資料 8 参照）
 実施時期：2010 年 6 月実施
 実施方法：各学科専攻をとおして専任教育職員に配布。
 回収数：専任教育職員 127 名中 63 名から回収。 回収率 = 49.6%
- 2010 年度「マイライフ・マイライブラリー」ガイダンスに関するアンケート（資料 9 参照）
 実施時期：2010 年 6 月実施
 実施方法：本プログラムのガイダンスを専攻全体で活用している現代教養学部人間科学科心理学専攻の協力を得て、実際にガイダンスを活用した専任教育職員に配布。
 回収数：該当専任教育職員 7 名中 5 名から回収。 回収率 = 71.4%

本プログラムは、運営委員会による組織的な運営が行われ、当初の計画を着実に実行し、また、実施状況に合わせて柔軟に内容の見直しや充実をはかった。なお、今回の自己点検・評価は、運営委員会内の各関係組織の視点から自己点検・評価を行った上で、自己点検・評価委員会が全学的視点から点検・評価を行うこととした。

第 章 滞在型図書館

到達目標

知的探求の拠点となる「滞在型図書館」を実現する。

本プログラムの実施により、既存の図書館サービスの利用の活性化をはかる。

点検・評価項目

- 1 新しいフロア構成は、学生の多様なニーズに応え、学習環境が向上しているか。
- 2 学習環境の向上の結果、滞在型図書館となっているか。
- 3 既存の図書館サービスの利用の活性化がはかられたか。

【実施状況】

1. フロア構成および新スペースの機能

現在の東京女子大学図書館は、1996年8月竣工され、地上3階、地下1階の4フロアからなっている。フロア面積と「マイライフ・マイライブラリー」開始前後のフロア構成の変化は表1のとおりである。(図面と写真は資料1~3参照)

表1 図書館のフロア面積およびフロア構成の変化 (変更部分：ゴシック)

	2007年度まで	2008年度から
3階 (1,528 m ²)	開架書庫、グループ閲覧室 (No.1~3)、特別資料室 (新渡戸稲造記念文庫)	開架書庫、グループ閲覧室 (No.1~3)、特別資料室 (新渡戸稲造記念文庫)
2階 (1,659 m ²)	開架書庫、ブラウジングルーム、電子メディアコーナー	開架書庫、ブラウジングルーム、CD-ROMコーナー、個人ブース
1階 (1,473 m ²)	カウンター、新聞雑誌閲覧室、情報検索コーナー、開架図書 (参考図書)、マイクロ資料室	カウンター、新聞雑誌閲覧室、コミュニケーション・オープンスペース、リフレッシュルーム、グループ閲覧室、メディアスペース、AVブース、プレゼンテーションルーム
地階 (1,102 m ²)	開架書庫、閉架書庫、丸山眞男文庫	開架書庫 (参考図書含む)、閉架書庫、丸山眞男文庫、マイクロ資料室

2007年度末に、1階のほぼ全面と2階の一部を改修した。比較的新しい建物で、施設設備の傷みも少なかったが、学習支援機能を強化するため相応の費用をかけて改修を行った。

改修後に創出した新しいスペースは、次のとおりである。

メディアスペース(50席):シンクライアント(端末には最低限の機能しか持たせず、サーバ側でアプリケーションソフトやファイルなどの資源を管理するシステムの総称)のデスクトップPC48台と新聞検索優先端末2台を設置した。Windows環境のPCを利用して、学生は、インターネット検索やレポート作成等に活用している。

AVブース(12席):メディアスペースの一角にブースを設置した。各ブースは3人までが一緒にAV資料を視聴できる。AV資料のコーナーもブース脇にあり、自由に視聴できる。

コミュニケーション・オープンスペース(53席):グループ学習を想定して設置した。貸出用のシンクライアント・ノートPCを利用し、メディアスペースと同様に図書館のデジタルコンテンツを利用することができる。

プレゼンテーションルーム(20席):ガラス張りで、図書館前のオープンスペースからも館内の移動をしている利用者からも良く見える環境となっている。パワーポイント等を利用した図書館のガイダンス、学生たちの小規模の発表、ゼミ等の授業、教員と学生の研究会、学内組織の行事等、多目的に利用されている。スクリーンとビデオプロジェクター、資料提示器が備え付けられている。

リフレッシュルーム(51席):館内で唯一飲食可能なスペース。滞在型図書館として学習・研究の合間に気分転換できる空間となることを想定して設置した。貸出用のシンクライアント・ノートPCの利用およびスペース奥の壁際にあるインターネット検索専用端末(立ったまま使用)4台の利用も可能である。

グループ閲覧室No.4~6(19席):3階の3室に加えて、元の館長室や応接室を利用して、1階にも3室設けた。遮音性が高く図書館資料を利用したグループ学習等に利用されている。貸出用のシンクライアント・ノートPCの利用が可能。

個人ブース(8室=8席):1人で集中して勉強できるスペース。表2(p.9)にあるように利用度も高い。貸出用のシンクライアント・ノートPCの利用が可能。

なお、2007年度より図書館入口脇(カウンター前)に学生の知的関心を喚起するため、電子掲示板を設置した。キャリア・センターや国際交流センターの行事、キリスト教センターの集会開催、研究所の講演会・セミナー、学生生活課(キャンパスツアーの広報、アルバイト求人システム等)の情報を発信している。

2. 利用状況

(1) 新スペースの利用状況

メディアスペース

1人で利用する学生の他に、2,3人で共同利用している学生も見られる。

図書館施設設備の利用が、学生の大学における学習状況と連動しているため、学期末試験前の1か月間や卒業論文の提出期限前は、朝からすべての端末が利用されていることが多い。PCの順番待ちをする学生も多いため、2008年度後期(2009年1月)から、一定の時間で利用学生の「総入れ替え」を行うこととした。できるだけ多くの学生の利用を促進することを目指し必要に応じて「総入れ替え制」を継続して行っており、最近では学生にも定着してきている。

A Vブース

表2(p.9)のとおり、2008年度「マイライフ・マイライブラリー」アンケート(以下、「2008年度アンケート」という。資料5参照)と2009年度「マイライフ・マイライブラリー」アンケート(以下、「2009年度アンケート」という。資料6参照)の結果によれば、新スペースの利用度(回答者中の利用したことがあると答えた学生の割合)は、2008年度25.3%、2009年度30.7%となっており、12席のA Vブースがよく利用されていることがわかる。

コミュニケーション・オープンスペース

読書をする学生、ノートPCを使いグループ学習をする学生、教員を囲んで話し合いをしている学生などが見られ、さまざまな目的に利用されている。

プレゼンテーションルーム

図書館ガイダンス以外の利用状況は以下のとおりであり、

[2008年度]

学生の申込みによる利用(プレゼンテーション準備、研究会等) 28回

教員の申込みによる利用(ゼミ等) 16回

キャリア・センター等の学内組織による利用 7回

[2009年度]

学生の申込みによる利用(プレゼンテーション準備、研究会等) 18回

教員の申込みによる利用(ゼミ等) 29回

キャリア・センター等の学内組織による利用 6回

2008年度と2009年度の利用状況を比較すると、教員の申込による利用が増加している。

リフレッシュルーム

滞在型図書館には必要な息抜きを想定し、飲食可能なスペースとして設置された。1人あるいはグループで学習したり、昼休みなどに昼食持ち寄り、話し合い等をしている姿が多く見られる。(p.9 2010年度「マイライフ・マイライブラリー」自己点検・評価アンケートQ5の利用目的参照)

グループ閲覧室

[2008年度]

年間を通じて1日当たり4.8グループの利用があった。

授業開講期間(4月~7月、10月~1月)で見ると1日当たり6.1グループ。

[2009年度]

年間を通じて1日当たり5.5グループの利用があった。

授業開講期間(4月~7月、10月~1月)で見ると1日当たり6.5グループ。

個人ブース

[2008年度]

年間を通じて1日当たり26.8時間、1室あたり3.4時間の利用があった。

授業開講期間(4月~7月、10月~1月)は、1日当たり35.3時間、1室あたり4.4時間。

[2009年度]

年間を通じて1日当たり29.1時間、1室あたり3.6時間の利用があった。

授業開講期間（4月～7月、10月～1月）は、1日当たり35.2時間、1室あたり4.4時間。

（2）入館者数と図書の貸出冊数

上述した新スペースによる環境整備というハード面の充実と、第 章、第 章で述べる学生協働サポート体制や学習支援プログラム等のソフト面の充実の両者を合わせた利便性の向上により、学生の図書館利用が促進されている。

利用統計（資料4参照）によると、入館者数は前年度比で2008年度34.2%増、2009年度4.2%増（本事業全面実施前の前々年度比では39.8%増）、館外貸出冊数は前年度比で2008年度5.7%増、2009年度8.3%減（本事業全面実施前の前々年度比では3.1%減）となっている。

館外貸出冊数は2008年度には増加したものの、2009年度は減少している。

このように入館者数の増加が館外貸出冊数につながらない原因としては、館内でPCを利用できる環境が整ったことにより、館内でレポート等を作成する学生が増加したことが考えられる。日常的な学生の資料の利用状況からも、その様子がうかがえた。2009年度の館内利用冊数は、総数で46,736冊であり、館外貸出総冊数65,633冊に対する割合は71.2%に達していた。

【点検・評価、長所・問題点】

1. フロア構成および新スペースの機能

（1）各スペースの使い分け

会話可能なスペースを1階に集中させ、2階、3階、地階の各フロアは、従来どおりのフロアを保つという明確なゾーニングを行った。これにより、会話を伴うグループ学習は1階の新スペース、1人で静かに読書や学習をする場合は2階、3階、地階の一般閲覧席という使い分けができるようになり、学生の多様なニーズへ対応できる環境となった。

（2）各スペースのPC環境

改修以前は、図書館のPCはOPAC検索・情報検索用のみであった。AVブース、CD-ROMコーナーを除くすべての新スペースでは、本プログラムで導入したシンクライアント端末により、ワード、エクセル、パワーポイントが利用でき、インターネット接続でOPAC、情報検索等も可能とした。また、本学のキャンパス整備計画により2009年秋に図書館前にオープンスペースができたため、学内の無線LANが図書館1階・2階および3階の一部で利用できるようになった。この結果、学生の個人PCの持込み利用が可能となり、利便性が向上した。

PCが不足しているという状況はあるものの、図書館内でPCが使えることで、図書館がこれまで蓄積してきた蔵書を利用しながらレポートや授業のための資料作成ができる点は大きなメリットと言え、学習環境が向上している。

2. 利用状況

(1) 各スペースの利用状況と満足度

2008年度アンケート、2009年度アンケートで、各スペースについて利用の有無をたずねた。新スペースの利用率(回答者中の利用したことがあると答えた学生の割合)は表2のとおりである。個人ブース以下は収容スペースも狭く、利用手続きの必要な場所もあるためか、全回答学生の2割から3割強が利用していると回答しているのみである。リフレッシュルーム、メディアスペース、コミュニケーション・オープンスペースについては、全回答学生の6割から8割が利用したことがあると回答しており使い勝手の良さを示している。

表2 新スペースの利用率

スペース名称	2008年度		2009年度	
	回答者数*	利用率	回答者数*	利用率
リフレッシュルーム	592	78.1%	824	82.9%
メディアスペース	507	66.9%	693	69.7%
コミュニケーション・オープンスペース	477	62.8%	647	65.3%
個人ブース	226	29.8%	333	33.6%
AVブース	192	25.3%	305	30.7%
プレゼンテーションルーム	179	23.6%	212	21.5%
グループ閲覧室	176	23.2%	258	26.1%

* 利用したことがあると答えた回答者数。

2010年度「マイライフ・マイライブラリー」自己点検・評価アンケート(以下「2010年度アンケート」という。資料7参照)「Q4」で、利用頻度をたずねた結果、一番頻度が高いのはメディアスペースで、

「非常に利用している」割合(回答者数/回答者総数)24.9%、「利用している」31.7%、「やや利用している」20.4%、合計77.0%である。次に高いのはリフレッシュルーム、コミュニケーション・オープンスペースの順である。

さらに利用目的については、同アンケート「Q5」において、次のような結果となった。「回答者数/回答者総数」で算出し、多い順に記載。

●メディアスペース

レポート・論文作成 54.8%、 課題・試験勉強 45.5%、 インターネット・メール 39.2%、 データベース・情報検索 36.5%、 グループ学習活動 2.9%、 その他 1.5%

●コミュニケーション・オープンスペース

課題・試験勉強 37.6%、 グループ学習活動 26.7%、 レポート・論文作成 21.8%、 インターネット・メール 8.0%、 読書 7.4%、 データベース・情報検索 5.6%、 その他 1.3%

● リフレッシュルーム

飲食 55.5%、 課題・試験勉強 24.0%、 グループ学習活動 16.1%、 読書 11.2%、
レポート・論文作成 9.9%、 インターネット・メール 4.7%、 データベース・
情報検索 3.1%、 その他 2.1%

● 貸出用ノートPC

レポート・論文作成 37.4%、 課題・試験勉強 28.4%、 インターネット・メー
ル 19.0%、 データベース・情報検索 16.6%、 グループ学習活動 8.1%、 その
他 1.0%

以上の結果から、学生が、各スペースの特性に即して利用していることがわかる。特にメディアスペースでは、「レポート・論文作成」あるいは「課題・試験勉強」を目的に利用している状況が顕著に見られる。「2.各スペースのPC環境」で記載したように、「図書館の蔵書（データベース等の電子的な資料を含む）を利用できるという大きなメリット」が十分に生かされている。

2010 年度アンケート「Q6」で各スペース等の満足度をたずねた結果、コミュニケーション・オープンスペースについては利用者の 95.5%、リフレッシュルームについても利用者の 86.6%が肯定的回答（「非常に満足している」から「満足している」「やや満足している」まで）をしている。「Q7」による各スペースの学習環境の充実についても、メディアスペースが利用者の 95.2%、最も低いAVブースでも利用者の 86.7%の学生が肯定的回答（「非常にそう思う」から「そう思う」「ややそう思う」まで）を示している。

2008 年度アンケートでは、既存のスペースである一般閲覧席の利用度が一番高かった。2009 年度アンケートでも利用度は 75.3%と高くなっている。2010 年度アンケート「Q8」で「1階での読書・学習」について図書館利用の重要性を聞いた結果 81.7%の学生が肯定的回答（「非常に重要である」から「重要である」「やや重要である」まで）をしている。他方で「2,3,地階の一般閲覧席での読書・学習」の重要度についての肯定的回答も 94.0%に上っている。

以上の結果から、図書館従来の学習環境を保持しながら、最近の学習形態の変化に伴った有益な環境を図書館が提供できているといえる。

(2) 多様なニーズへの対応

2010 年度アンケート「Q5」において各スペースの利用目的を訊いた。この回答結果から、回答者の「利用目的」が1つなのか、あるいは複数なのかを見るため、表3(p.11)のとおり、「利用目的数の平均値」を算出した。

平均値算出方法

1. Q5のスペース毎の回答における、利用目的の選択数の合計をAとする。
2. Q5の各回答において、利用目的を選択している回答者数をBとする。
3. AをBで割った数値を平均値とする。

表3 利用目的数の平均値

	メディア スペース	コミュニ ケーション・ オープン スペース	リフレッシュ ルーム	グループ 閲覧室	個人 ブース	プレゼン テーション ルーム	A V ブース	貸出用 ノート P C
A) 利用目的の選択 数の合計	1,225	735	859	242	431	226	380	751
B) 利用目的を選択 した回答者数	568	464	535	206	284	179	230	343
利用目的数の平均値 (A / B)	2.16	1.58	1.61	1.17	1.52	1.26	1.65	2.19

この結果、グループ閲覧室とプレゼンテーションルームはほぼ単一の目的での利用が多いことがわかる。また、他のスペース、特にメディアスペース、貸出ノートPCは、複数の利用目的をもって利用されている。p.9、p.10で述べたように、メディアスペースや貸出用ノートPCは、レポート・論文作成、課題・試験勉強、インターネット・メール、データベース・情報検索等に利用されていることがわかる。

(3) 滞在型図書館の実現

上記(2)で述べたように、学生は多様な目的に応じて各スペースを利用しており、図書館は学生の多様なニーズに応えていると考えられる。滞在型図書館の1つの要素を満たしていると言えよう。

また、2010年度アンケートで「Q12: 図書館を滞在して利用していますか」とたずねたところ、「非常にそう思う」28.7%、「そう思う」36.4%、「ややそう思う」24.5%で合計89.6%と、9割近くの学生が「滞在」する図書館と認識していることが確認できた。さらに、「Q5」により各スペースの利用目的をたずねた集計結果を見ても、学習が主な目的であり、単に「滞在」するだけではなく、学習のために滞在する「学習滞在型」が実現できていることがわかる。

そして、このような学習滞在型図書館の実現が、2008年度に前年比34.2%増、2009年度にはさらに2008年度の4.2%増という入館者数の増加の一要素になっていると考えられる。

(4) 狭隘化の問題

入館者の増加は、図書館にとって望ましい傾向である一方で、結果として館内のスペースが狭隘化し、利用者の快適な学習環境が損なわれる恐れもある。滞在型図書館としては、スペース不足は重大な問題である。

2010年度も入館者数が増えており、メディアスペース利用者の総入れ替えを、5月中旬から開始している。今後狭隘化の解消について、スペースの有効活用などの方策を講じていく必要がある。

(5) 既存の図書館サービス利用の活性化

2010年度アンケート「Q8: 図書館を利用する際、次の事柄はどのくらい重要ですか？」との設問に対し、「2,3,地階の一般閲覧席での読書・学習」「図書館所蔵の本・雑誌の館内利用」「図書館所蔵の本の館外貸出」について、肯定的回答（「非常に重要である」から「重要である」「やや重要である」まで）は、94.0%、93.6%、82.8%となっている。館内での学習、館内利用を重要としている割合が9割を占め、図書館の環境整備に伴って、各スペースで有意義な学習を進めていることがわかる。本プログラムによって本来の図書館全体のサービスは向上したが、本プログラム導入前にはデータを収集していないため、導入前後の数値的な比較検証は難しい状況である。

「Q11: 学習の際に、次の図書館の設備やサービスが役に立っていると思いますか？」との設問に対し、「図書・雑誌の所蔵」「電子ジャーナル、データベース」とともに肯定的回答（「非常にそう思う」から「そう思う」「ややそう思う」まで）が9割以上を占めている。ハード面での充実がソフト面での高い満足度につながっていると考えられる。

2010年度「マイライフ・マイライブラリー」教員アンケート（以下「教員アンケート」という。資料8参照）においても、「Q5: 学生の図書館の利用が増えていると思いますか?」「Q7: 課題などで図書館の利用を勧めた場合、その効果が現れていると思いますか?」という設問について肯定的回答（「非常にそう思う」から「そう思う」「ややそう思う」まで）が8割以上、「Q9: 学生のレポートを指導するにあたり、図書館は役立っていると思いますか?」「Q11: 学生の卒業論文を指導するにあたり、図書館は役立っていますか?」という設問に対しては、9割以上の教員が肯定的回答（「非常にそう思う」から「そう思う」「ややそう思う」まで）をした。本プログラム実施後におけるアンケートにおいて教員から良好な回答を得られたことから、一定の効果を生み出していると言えるだろう。

本プログラムの導入により入館者数が増加するとともに、学習環境が向上し、グループ学習やPCの利用を可能とした学習形態をサポートできる体制も整えられた。それにより以前よりも図書館サービス全体の利用の活性化ははかられている。しかし、滞在型図書館であること（館内でレポートや課題に取り組む）、また、電子資料の普及から館外貸出冊数の減少は今後も続く可能性がある。館外貸出の減少については、学生の学習密度の希薄化が背景にあるかどうかの検証が、教務委員会協力のもとに必要であろう。

【将来の改善に向けた方策】

PCの不足への対策として、無線LAN利用のPCから図書館内で印刷ができるようにするなど利便性を高め、持ち込みPCの利用を促進していくことが必要だと考えられる。その際、会話を伴わない1人での学習の場合は2階、3階、地階の一般閲覧席に誘導し、学生が図書館の蔵書をよりいっそう活用し、学習成果を上げられるように支援することを目指す。

館内スペースの狭隘化については、図書館だけの解決策は難しく、また大学全体の学習環境の確保という意味で、情報処理センターや視聴覚教育センターの学習環境と連携しつつ改善の可能性を探っていく。

第 章 学生協働サポート体制

到達目標

「学生協働サポート体制」を整備し、学習支援と学生アシスタント自身の成長を支援し、学生のキャリア構築力と社会人基礎力を育成する。

点検・評価項目

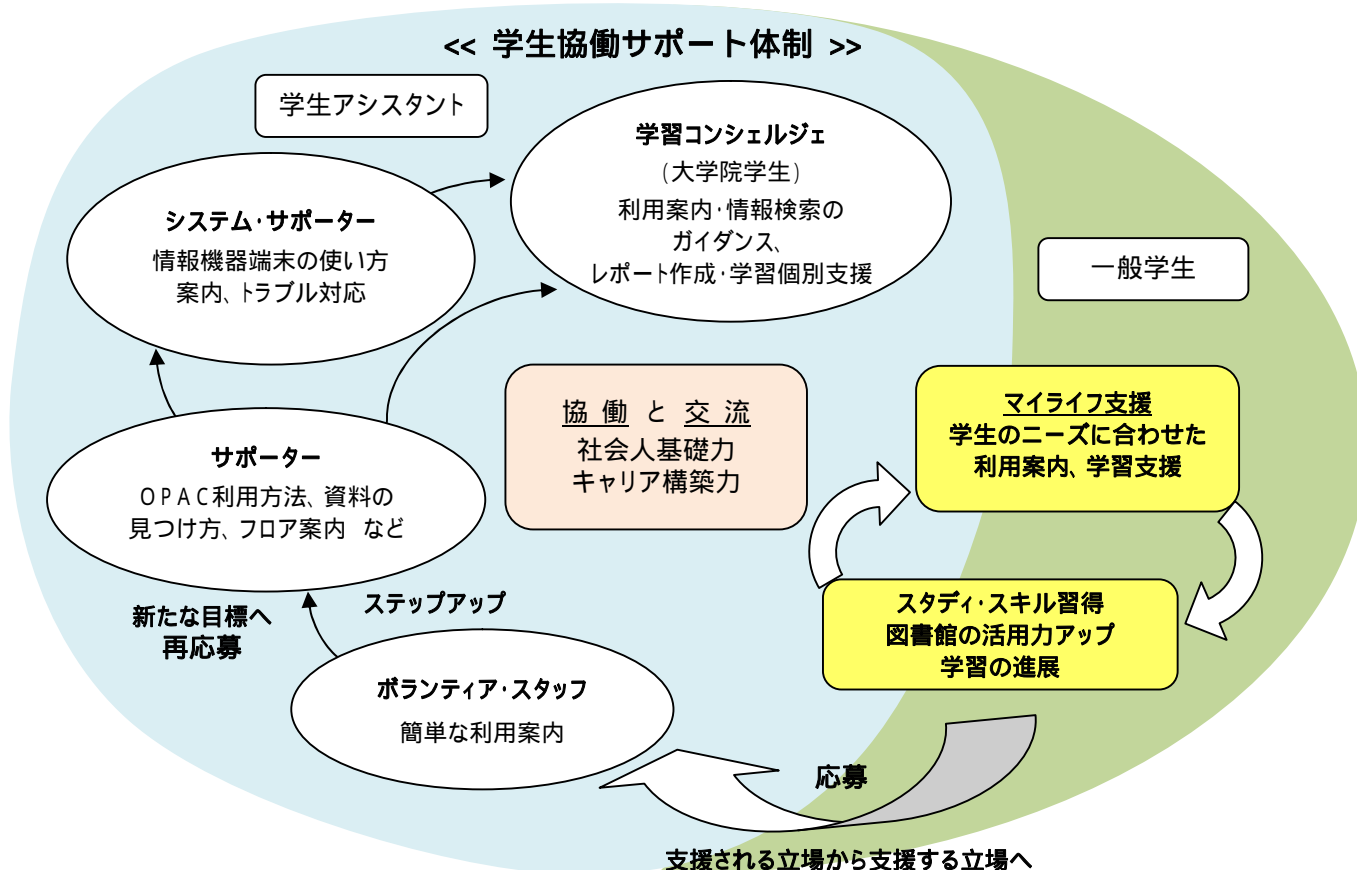
- 1 「学生協働サポート体制」は十分に実施され、一般学生*の学習を支援できたか。
*本報告書における「一般学生」とは、学生協働サポート体制の学生アシスタントの学生以外の、本学学生全体を指す。
- 2 「学生協働サポート体制」を通じて、学生アシスタントに成長が見られたか。
- 3 学生のキャリア構築力と社会人基礎力の育成を支援できたか。

【実施状況】

1. 全体

学生協働サポート体制は、「マイライフ・マイライブラリー」事業の中で、学生一人ひとりの生きる力を引き出す「マイライフ支援」を担う取組である。図書館内に4種類の学生アシスタント（ボランティア・スタッフ、サポーター、システム・サポーター、学習コンシェルジュ）を配置し、図2のとおりそれぞれの役割を担う。学生アシスタントが利用者の学生を支援し、それまでの「支援される立場」から「支援する立場」に変わることによって学生自身の成長を企図している。

図2 学生協働サポート体制による一般学生と学生アシスタントとの関連図



ボランティア・スタッフ、サポーター、システム・サポーターは、学生支援GP選定直後の2007年度後期から、学習コンシェルジェは2008年度前期から活動を開始した。サポーター、システム・サポーター、学習コンシェルジェは学生アルバイトとして大学が雇用し、ボランティア・スタッフには図書券を活動状況により出している。一人でも多くの学生が「マイライフ・マイライブラリー」の活動に関わることができるよう、応募してくる学生は出来る限り採用している。

学生アシスタントの応募者数は、初年度(学習コンシェルジェは未実施)は41名であったが、全面実施した2008年度以降は、表4(p.15)のとおり、年度を追うごとに学生アシスタントの存在が認知され、毎学期、予定の募集数を超す応募があり、2010年度前期には99名に増加した。実際の活動人数も、2007年度後期は24名であったが、2008年度以降は表4のとおり増加し、2010年度前期は74名となっている。

学生アシスタント同士の連絡体制を密にし、帰属意識を高めるため、定期的に交流ミーティングを開催している。学生アシスタント全員が一堂に会する全体ミーティングとアシスタント毎の業務別ミーティングを前・後期に各1回実施している。全体ミーティングで出された意見には次のようなものがある。

- 質問のでてきた背景を考えることで、一問一答のような答え方ではなく、次につながる返答ができるようになった。
- システム・サポーターの仕事は自由度が高いため、どこを意識するか、どのような問題を見つけるか、常に考えるようになった。また、問題を見つけた時にも、そこで終るのではなく、どうしたらいいか、提案してこそ意味があるという考え方に変わった。
- 利用者の質問の中には、自分自身が気にしていなかったこと、知らなかったことが多々あり、そういう問題を解決することで、自分も学ぶことができた。図書館で過ごす時間が多くなり、図書館がより身近になった。
- 利用者が何に困っているのか、また次にどうしたいのかをじっくり見極め、理解し、最大限の手伝いをできるように、また、次回からその利用者が1人で同じ問題を解決できるように「答え」だけでなく「方法」を案内するよう心がけた。

これらの回答から、アシスタントの成長を読み取ることができる。

2. 各アシスタントの状況

ボランティア・スタッフとサポーターは、活動時に、一般学生や他のアシスタントとの区別のため、目印として腕章やエプロン等を着用する。それらの着用により、アシスタントとしての自覚を促すとともに、活動へのモチベーションを高める効果を期待している。

各アシスタントの2008年度、2009年度の活動状況は表4(p.15)のとおりである。

表 4 学生アシスタントの活動状況 (2008 年度・2009 年度)

アシスタントの種類	年度	応募者 (前・後期延べ人数)	採用数	活動総数 (延べ活動回数)	*印のうち 活動人数
ボランティア・スタッフ **	2008	20	20*	129	10
	2009	7	7*	38	6
サポーター	2008	53	46	785	
	2009	63	55	809	
システム・サポーター	2008	24	16	374	
	2009	27	27	417	
学習コンシェルジェ	2008	14	10	128	
	2009	16	16	315	
計	2008	111	92	1,416	
	2009	113	105	1,579	

** 「利用案内」を行うボランティア・スタッフの数。「学生選書ツアー」参加者、「お薦め図書ポップ」応募者、「図書館だより」作成参加者の数は含まない。

(1) ボランティア・スタッフ

自分自身が図書館を利用する傍ら、他の学生の求めに応じて、利用方法等についての質問に答えている。1回の活動時間の目安は1時間以上としている。

ほかに、「学生選書ツアー」参加者、「お薦め図書ポップ」応募者、「図書館だより」作成参加者もボランティア・スタッフとして扱っている。

「利用案内」のボランティア・スタッフは図書館を利用しながら活動するため、返本作業という動きのあるサポーターと比べて目立ちにくく、利用される(質問される)回数が少ない。このことは、毎回、全体ミーティング、業務別ミーティングで問題点として出されている。

これまでにボランティア・スタッフの提案に基づき実施された改善方策は以下のとおりである。

- ボランティア・スタッフの目印の追加(2008年度から実施)
- 2階と3階の同位置に「ボランティア・スタッフ優先席」を設定(2008年度途中から実施。場所については図書館側で設定)
- 優先席へ利用者を誘導する案内板を設置した。(2009年度後期中途から実施)
- ボランティア・スタッフを配置していなかった地階に「ボランティア・スタッフ優先席」を設置した。(2009年度後期中途から実施)

「利用案内」以外のボランティア・スタッフの活動内容と参加状況は以下のとおりである。

「学生選書ツアー」(2008年度8名、2009年度14名参加)

書店で蔵書の選書を行い、自身が選んだ本の書評を書く活動。書評は本のカバーとともにコミュニケーション・オープンスペースに展示した。

「お薦め図書ポップ」(2008年度計3名、2009年度計11名(作品数2008年度5、2009年度19)が応募・参加)

各自が作成したポップをコミュニケーション・オープンスペースに展示した。

「図書館だより」の企画編集（2008年度計9名、2009年度計13名が応募・参加）

2008年度：「新スペース紹介」「OPACを活用しよう」「AVブース紹介」という3つの特別号を発行した。

2009年度：「学生アシスタントへのアンケート」と「レポートを快適に書くために」という2つの特別号を発行した。

このように、業務に協働の要素と幅を持たせた結果、各自の得意分野で積極的に活動し、参加へのモチベーションを高めている。特に「図書館だより」の企画編集は、グループワークで作成を行い、グループ内で相互に連携するとともに他のグループとも連携・調整をはかり、協働していくため、参加した学生の満足度・達成感は非常に高いものとなっている。

(2) サポーター

返本・書架整備などの仕事の傍ら、ボランティア・スタッフと同様に、他の学生からの質問に答えている。新入生オリエンテーション時の館内案内の仕事も受け持つ。

よく質問されるのは、「OPACで検索した本が見つからない」、「配架の順番」、「関係の本を探したい」、「何冊までどのくらいの期間借りられるのか」等の蔵書利用についてである。従来は1階のカウンターのみで行われていたサービスが、サポーターの学生によって、2・3・地階の書架フロアでも行われるようになった。このような支援を行うために、サポーターの学生はこれまでの質問・回答集のプリントを読み、常に携帯するなど、自分自身が図書館の良き利用者に成長するよう努力している。学生アシスタントアンケートにおいて、サポーターをやってよかった点として「図書館に詳しくなったこと」「様々な本に出会えたこと」「本を探すスピードが速くなり、自分が利用する時に役立つこと」「OPACなどを積極的に使うようになったこと」などが挙げられている。

(3) システム・サポーター

メディアスペース等のPC（全体で70台）の利用者への操作説明や、トラブル対応を行う。アシスタント・アイランドで待機し、定期的にメディアスペース等を巡回してプリンターのトラブルや困っている利用者とその都度対応している。メーリングリストで日々の活動報告を行って、タイムリーな情報交換をはかっている。採用時には、ワード、エクセル、パワーポイントのスキルチェックを実施し、チェックシートの判定には、情報処理教育運営委員長の協力を得ている。

応募の際に、スキルチェックシートを提出することにより、自分のスキルの弱点を自覚し、スキルアップを目指しながら、活動している。活動にあたっては、これまでの質問の内容とその回答例の資料を参照している。システム・サポーターをやってよかった点として「以前よりも色々な機能がわかるようになったこと」「自分のスキルアップにもつながり、図書館についてよく知る良い機会になった」などが挙げられている。

さらに、全体ミーティングでメンバーの一人が、マニュアル作成を提案したことがきっかけとなり、業務別ミーティングでの話し合いを経て、自主的にマニュアル（Q&A集）作りに取り組んだ。その成果は図書館が図書館のホームページ上に「PC質問箱」

(全 92 項目)として掲載している。

(4) 学習コンシェルジェ

大学院学生がアシスタント・アイランドで、学部学生に対し資料の探し方、レポート・論文作成についての、一般的で基本的な質問等に対応することによって学部学生の学習支援を行っている。新規採用にあたっては、必ず図書館長とマイライフ・マイライブラリー運営委員会委員による面接を行っている。メンバーはメーリングリストを管理・運営し、日々の活動報告と情報交換を行っている。

活動初年度(2008 年度)はまだ認知度が低く、利用が少なかった。このため、2008 年度のマイライフ・マイライブラリー運営委員会で活性化の方策を検討した。2009 年度からは、年度初めの図書館の新入生へのオリエンテーションで、学習コンシェルジェが自己紹介を兼ね図書館の概要説明を行うと共に、特に博士後期課程の学習コンシェルジェについては、第 3 章で記載しているガイダンスも担当した。

ガイダンスを担当した博士後期課程の学習コンシェルジェは 4 名で、実施回数は計 19 回であった。内訳は、情報検索ガイダンスが前後期で 15 回、基本的なレポートの書き方ガイダンスが前後期で 4 回であった。2010 年度からは、学習コンシェルジェとしての仕事の経験およびガイダンス受講経験がある修士課程の学習コンシェルジェもガイダンスを担当している。

ガイダンスを担当した学習コンシェルジェから次のような感想が出されており、自身の情報検索スキルやプレゼンテーション能力の向上、キャリアアップにもつながった経験などが述べられている。

ガイダンスを担当して得たものとして、

- 「OPAC の使い方を基本からとおして確認できた。OPAC やデータベースのページを、自分の研究とは関係ない部分まで見たことで、全体を把握できた。」
- 「毎回ガイダンスを担当するたびに新しい機能を教えてもらい、私の図書館ライフにも役立つ。」
- 「90 分のガイダンスの準備の中で、時間配分や構成等の組み立て方を学ぶことができた。」

受講者の反応/全体的な感想・提案として、

- 「受講生はメモを取るなどして説明に耳を傾けてくれた。実習に際しても、説明を受けた機能を積極的に試し、質問して問題を解決するなど、受講して得たことを実践している様子が窺えた。」
- 「論文を検索するというのにまだ慣れていない時期(3 年次)だと思うが、実習時間では、早速プリントアウトしたり、新機能に感心したりと、率直な反応を見ることができ、今後に役立ててもらえるのではないかと思った。」
- 「ゼミによって先生のカラーや学生のカラーが様々なのでその都度うまく対応していく必要性を感じる。」
- 「月曜日の 1 時限にもかかわらず大部分の受講生(1 年次)が終始、熱心に注意を向けてくれた。ほとんど全員が、これからはじめてのレポート作成に臨むという緊張感もあり、関心を持って聞いてもらえた。」

さらに、専攻によっては、教員が積極的に利用を呼びかけたこともあって、2009 年度にはアシスタント・アイランドでの利用者が格段に増加した。前期の利用者は延べ 73

人、後期は延べ 100 人であった。

相談内容は、レポートの書き方から、卒業論文に関する質問まで、多岐にわたっている。学習コンシェルジェは、導入当初から教育を支援するという立場を明確にし、利用者の学部学生自身が学習していくための支援という位置づけで活動している。このため、卒業論文に関する質問に対応した場合には、学習コンシェルジェからの報告メールを、図書館からその利用者の指導教員へ回付し、指導教員の指導との齟齬を防いでいる。

3. 学生のキャリア構築力と社会人基礎力の育成支援

本学では、「キャリア」を「個人が生涯をとおして主体的に社会参画することであり、就業や地域活動を通じて、さらなる自己確立を果たすとともに社会に貢献することである。」としている。そのため、本学のキャリア教育（キャリア構築支援）の目的は、リベラル・アーツ教育を基盤に、学生が社会認識と自己理解に基づき、社会と自分の関わりを考え、社会貢献を果たすことをめざしながら、主体的に自らの生き方と将来の進路・職業を選択する能力・意識を育てることにある。

「マイライフ・マイライブラリー」と同年度に現代GPに選定された「東京女子大学キャリア・ツリー」は、このような本学のキャリア教育のいっそうの充実をはかるものであり、学生が自己を確立し、社会参画するための正課教育と正課外教育との連動による総合的キャリア構築支援を目指している。

このようなキャリア構築支援のあり方は、前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力の3つの能力により構成された「社会人基礎力」の育成と非常に密接な関係にある。「マイライフ・マイライブラリー」では、キャリア・センター（「東京女子大学キャリア・ツリー」）と連携し、このプログラム全体を通じて、全学生を対象としたキャリア構築支援を行うことで、同時に社会人基礎力の獲得もはかっている。

特に学生アシスタントにおいては、上述のとおり、それぞれの業務で解決策を探り、協働しながら問題解決にあたっている。さらに、日々のメーリングリストや定期的な交流の機会を通じて情報の共有と意思の疎通をはかることで、「より良い人間関係」と社会人基礎力を身に付け、それをキャリア構築力につなげることを企図している。

【点検・評価、長所・問題点】

1. 一般学生への学習支援

【実施状況】に記載のとおり、学生協働サポート体制は十分な人数の学生アシスタントが確保できている。学生協働サポート体制は、仕事にバリエーションがあることから、それぞれの学生の適性に合った活動の場を提供できている。学生アシスタントから寄せられたアンケート（学部学生のみ、回収率は88.6%）では回答した全学生が学生アシスタントを担当して「良かった」と回答している。

学生協働サポート体制は、階層構造のような上下の関係にあるのではない。学習コンシェルジェは大学院学生のみであるが、その他はどのアシスタントから始めても良い。ボランティア・スタッフ経験者がサポーターに、サポーター経験者がシステム・サポーターに応募するなどの動きが見られ、半数近くの学生が他のアシスタントに挑戦したいと答えており、実際にその動きも見られる。ステップアップするための、ロールモデルも提供して

いる。これまでの活動実績から見られる「学生協働サポート体制による一般学生と学生アシスタントとの関連図」は図2(p.13)のとおりである。

ボランティア・スタッフの利用は少ないが、問題意識を持って活動を行い、改善策の提案実施を積み重ねており「チャレンジしやすいモデルを設定することにより、自分に自信が持てない学生のやる気を喚起し、一歩前に踏み出させる」という当初の目的を達成している。

さらに、2010年度アンケート「Q12」～「Q15」の回答を、学生アシスタントと学生アシスタント以外の一般学生のグループに分けて、比較した結果は、表5のとおりである。

平均値算出方法

「非常にそう思う」=6点、「そう思う」=5点、「ややそう思う」=4点、
「ややそう思わない」=3点、「そう思わない」=2点、「非常にそう思わない」=1点
として積算した合計を回答総数で割った値。最高点は6点。

表5 学生アシスタントと一般学生の比較

[学生アシスタント]

	Q12 図書館を滞在して利用していると思うか		Q13 大学生生活を支援している場だと思うか		Q14 図書館利用でキャリア構築力が身に付いたと思うか		Q15 図書館利用で社会人基礎力が身に付いたと思うか	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
1. 非常にそう思う	18	42.9%	21	50.0%	6	14.3%	5	11.9%
2. そう思う	15	35.7%	16	38.1%	11	26.2%	10	23.8%
3. ややそう思う	8	19.0%	5	11.9%	11	26.2%	12	28.6%
小 計	41	97.6%	42	100.0%	28	66.7%	27	64.3%
4. ややそう思わない	1	2.4%	0	0.0%	10	23.8%	10	23.8%
5. そう思わない	0	0.0%	0	0.0%	4	9.5%	5	11.9%
6. 非常にそう思わない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
合 計	42	100.0%	42	100.0%	42	100.0%	42	100.0%
平均値(A)	5.19		5.38		4.12		4.00	

[一般学生]

	Q12 図書館を滞在して利用していると思うか		Q13 大学生生活を支援している場だと思うか		Q14 図書館利用でキャリア構築力が身に付いたと思うか		Q15 図書館利用で社会人基礎力が身に付いたと思うか	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
1.非常にそう思う	170	28.0%	256	41.4%	42	6.9%	29	4.7%
2.そう思う	219	36.1%	250	40.5%	88	14.4%	73	11.9%
3.ややそう思う	152	25.0%	98	15.9%	233	38.1%	225	36.6%
小 計	541	89.1%	604	97.7%	363	59.3%	327	53.3%
4.ややそう思わない	35	5.8%	8	1.3%	156	25.5%	168	27.4%
5.そう思わない	26	4.3%	5	0.8%	83	13.6%	103	16.8%
6.非常にそう思わない	5	0.8%	1	0.2%	10	1.6%	16	2.6%
合 計	607	100.0%	618	100.0%	612	100.0%	614	100.0%
平均値 (B)	4.75		5.20		3.71		3.53	

注)統計的検定の結果、Q12、14、15の、学生アシスタントと一般学生の平均値の間には、統計的有意差 ($P < 0.05$)がある。Q13は、統計的有意差はない。

表5から、一般学生に比べて学生アシスタントの方が、Q12、14、15の平均値のポイントは高くなっており、学生アシスタントは、滞在して図書館を利用する割合が高く、また、キャリア構築力や社会人基礎力についても、身に付いたという実感を持っている割合が一般学生と比較して高いことがわかった。「Q13:図書館は大学生生活を支援していると思うか」については、一般学生と学生アシスタントの間に差はなかった。

次に、学生協働サポート体制が一般の学生にどの程度認知され、また活用されているかを点検する。

表6

		2008年度末	2009年度末
2008年度アンケートおよび 2009年度アンケート (1月に実施)	学生アシスタントの居場所も含めた認知度(平均)	44.6%	56.8%
	学生アシスタントの利用度(平均)	10.8%	11.3%

表6によると、2008年度末は44.6%の学生が学生アシスタント(存在および居場所)を認知し、2009年度末には56.8%の学生が認知しているという結果になった。4種類の学生アシスタントの平均認知度が、本プログラムの全面実施後、約2年経た段階で6割近いという結果から、学生協働サポート体制が学生に徐々に浸透しつつあることがわかるが、こ

のプログラムの認知度を高めるためのさらなる工夫が求められる。利用については、約 1 割の学生が利用している。

2010 年度アンケート「Q11」で、「学生アシスタントのサポート」が学習の際の役に立っていると思うかと直接的にたずねたところ、回答学生の 8 割以上が学生アシスタントのサポートを評価している。

2. 学生のキャリア構築力と社会人基礎力の育成支援

2010 年度アンケート「Q14：図書館利用でキャリア構築力が身についたと思うか」「Q15：図書館利用で社会人基礎力が身についたと思うか」については、過半数の学生から肯定的回答（「非常にそう思う」から「そう思う」「ややそう思う」まで）を得た。同設問について学生アシスタントからは、6 割以上が肯定的回答が示されており、学生協働サポート体制をとおして、学生アシスタントはキャリア構築力、社会人基礎力の習得を自ら実感している傾向がある。

一方、教員アンケートにおいては、「Q18：マイライフ・マイライブラリーの開始前と比較して図書館が学生のキャリア構築力の育成に役立っていると思いますか？」「Q20：マイライフ・マイライブラリーの開始前と比較して図書館が学生の社会人基礎力の育成に役立っていると思いますか？」との設問に対し 8 割近い肯定的回答（「非常にそう思う」から「そう思う」「ややそう思う」まで）が示された。

本プログラムが、学生アシスタントを経験した一部の学生については、キャリア構築力、社会人基礎力の養成に一定の効果을あげていることは学内においても認知されている。しかし、全学的なプログラムとして、それがどの程度一般学生に影響を及ぼし、どのような教育効果をあげているかについての全学的な検証は今後の課題と言える。

【将来の改善に向けた方策】

学生アシスタント自身の成長モデル（p.13 図 2 参照）については、システムとしてほぼ完成の域に達したということができるが、ボランティア・スタッフ以外は大学がアルバイトとして雇用し有償であることも含め、このプログラムへの参加者の数にはおのずと限界があり、すべての学生に経験させることはできない。社会人基礎力やキャリア構築力を養いながらステップアップしていくという学生の成長を全学的に広げていくための方策を探る必要がある。

また、さらに学生アシスタントの質の向上をはかる方策としてより主体的に図書館内の学習支援に関われるように学生アシスタントの企画によるイベントの開催等の機会を提供するなどの工夫も必要である。

一般の学生への認知度と利用度については、さらに増加をはかるよう取り組んでいく必要がある。具体的な方策としては、次のようなことが考えられる。

これまでの活動実績を参考にしながら、どうしたら「より多くの一般の学生」への学習支援が可能となるのかについて、学生アシスタントのミーティングで検討し、提案してもらおう。その際、学生アシスタントが他大学の図書館の動きについても目を向けて、本学の参考となる点があれば取り入れることもできるよう、図書館側からも情報提供を行い、他大学の同様の活動をしている学生との情報交換等の機会を設定する。

「一般学生への学習支援」の検証については、現状では認知度と利用度の測定にとどまっている。今後は、学生協働サポート体制によって一般の学生への学習支援がどの程度実現できているか、支援効果の検証が必要である。

第 章 本プログラムによる図書館サービスの多様化とその効果

到達目標

多様な図書館サービスを展開することにより、学習支援を行う。

大学全体の教育方針・目標の中で、本プログラムの位置づけを明確にし、その位置づけにおいて大学全体の教育を支援する。

点検・評価項目

- 1 学習支援プログラムおよびコンピュータ自習によるシステムにより、学習を支援できたか。
- 2 学内組織との連携で学生支援は強化されたか。
- 3 大学全体の初年次教育の中で、本プログラムの初年次学習支援は十分に役立っているか。
- 4 大学全体の教育方針・目標の中で、本プログラムの位置づけは明確になっているか。
- 5 本プログラムが大学全体の教育に対して効果をもたらしているか。

【実施状況】

ハード面での整備と合わせ、大学での学習に必要なレポートの書き方や文献の探し方等のスタディ・スキルの習得を支援するとともに、大学での学習の基本となる場を提供し、知的探求の拠点となる図書館を目指して以下の様々なサービスを提供している。

1. 学習支援プログラム

(1) 2008 年度

学外から講師を招き、以下のプログラムを実施した。

a) 図書館情報リテラシー教育プログラム

情報社会でキャリア構築力を身に付ける手がかりを提供する講演会と、学生のレポート、論文作成に関する基礎的知識の習得を支援するために、学術情報収集・整理・発信についての講習を実施した。

- 情報リテラシー講演会：90分×1回（5/13）参加者 25 名。
女性における「自立・学び・生き方」の構築に関する講演会
- レポートの書き方の基本：90分×（前期 6 回、後期 6 回）参加者延べ 159 名。
論述編・体裁編、構築編・文章編から成る実践的な講習
- 大学生としてのノートのとり方：90分×（前期 2 回、後期 1 回）参加者延べ 23 名。
授業形態に即した効果的な書きとり方を習得する講習
- 大学生としての本の読み方：90分×（前期 2 回、後期 1 回）参加者延べ

21 名。

授業の予習・復習、レポート・論文作成時に役に立つ本の読み方を、読書カード作成方法も合わせて習得する講習

b) 基礎的日本語能力養成プログラムによる初年次学習支援

前期は、主に新生を対象に「実践コミュニケーション力養成」講習と「文章の読み書き 入門編」講習を実施した。後期は「文章の読み書き 入門編」講習を就職活動を控えた学生にも役立つ内容を加え実施した。

- 「実践コミュニケーション力養成」講習：90分×前期4回、参加者延べ55名。

出版メディア、編集等に携わる講師により、インプロ（即興劇）、フィールドワークの手法等の紹介があり、コミュニケーションにおいて重要な“場”に参加する“姿勢”を学んだ。

- 「文章の読み書き 入門編」講習：90分×（前期10回、後期5回）、参加者延べ192名。

自分の「意見」を自分の「ことば」でわかりやすく「表現」するために必要なスキルを習得した。

2008年度は、参加者が30名に満たない講習もあった。講師派遣および企画を外部に業務委託したため、プログラムの内容が本学の学生のニーズに必ずしも適合しなかった。そこで、マイライフ・マイライブラリー運営委員会内の「学習支援作業部会」が、学習支援プログラムの見直しを行った。結果は以下のとおり。

2007年度後期および2008年度の実施内容の問題点

情報リテラシー講習と基礎的日本語能力養成講習との違いが不明確

図書館として支援が求められる事項

- 著作権および引用について
- 書誌情報の正確な書き方
- アンケートなどのデータの処理方法

学習支援のあり方

以下の3点に分類して実施する

- 情報の集め方（情報検索）
- 情報の処理（情報の処理方法と倫理的な問題への対応）
- 情報の発信（レポートの書き方）

(2) 2009年度

上記の検討結果を受け、2008年度第2回マイライフ・マイライブラリー運営委員会の承認を経て、2009年度からは以下のように実施した。

a) 「情報検索」ガイダンスと「基本的なレポートの書き方」ガイダンス

「情報リテラシー講習」という名称は使用せず、標記ガイダンスとして実施した。

また、学習コンシェルジェも各自の専門性を生かして担当した。

学生が、レポート、論文作成における必要な基礎的な知識を習得することを目的

に、学術情報収集・整理・発信についてのガイダンスを実施した。

- 情報検索ガイダンス：90分×（前期32回、後期16回）。この内、学習コンシェルジェ担当は、前期5回、後期10回。

参加者延べ892名。この内、1年次は315名で必修科目、あるいは個別の授業において活用された。

- 「基本的なレポートの書き方」ガイダンス：90分×（前期6回、後期1回）、参加者延べ175名。この内、学習コンシェルジェ担当は、前期3回、後期1回

b) 基礎的日本語能力養成講習

マイライフ・マイライブラリー運営委員会で日本語教育を専門とする教員が、プログラムの内容を見直した結果、本学で非常勤講師として日本語教育関連の授業を担当していた講師を依頼した。前期は1年次学生を対象とし、後期はキャリア・センターと連携して、主として就職活動を考えている学生を対象に以下の内容で行った。

- 前期テーマ：「『話しことば』を『書きことばに』」、90分×2回、参加者延べ59名。
- 後期テーマ：「‘わたし’をプレゼンテーションすることば」90分×2回、参加者延べ79名。

2. コンピュータによる自習システム

新たな支援の可能性を探り、今後の展開に結びつけられるよう標記システムを導入した。

コンピュータと携帯電話による自習システムにより、キャリア構築支援、基礎的日本語能力養成支援、英語学習支援を可能とする環境を設けた。新入生向けの図書館オリエンテーションで説明し、その後も必要に応じて小規模な説明会を実施した。

また、E-Testingについては、キャリア・センター主催の就職ガイダンスでプログラムの説明を行い、利用を促した。

(1) 2008年度

- 就職試験対策プログラム E-Testing(コンピュータ)
 - (本試験に近い環境の各種就職対策模擬試験をインターネット上で受験し、受験履歴等が自己管理できるシステム)
 - 申込者：653名 利用者：359名(内、40回以上受験者：47名)
- 英単語・漢字トレーニングプログラム モバイル・アカデミー(携帯電話)
 - (携帯電話を通じて、漢字(漢字検定2~5級のレベル)と英単語の英検1級~準2級のレベルの問題を解くことができる自習プログラム)
 - 申込者：511名 利用者：490名
- 文検トレーニングプログラム(コンピュータ)
 - (文章を正しく把握する、正しい表現で明確な文章や手紙を書くといった一般常識的な内容の講義・演習問題をインターネット上で受講・解答できる自習プログラム)
 - 申込者：153名 利用者：144名

- WebClass (コンピュータ) のコンテンツ
 - (自習コンテンツにより TOEFL 対策やレポート作成の基礎を学習したり、授業の教材やテストの作成、レポート提出や成績データの集計・分析、受講者へのメッセージ送信等がインターネット上で行えるシステム)
 - 「リメディアルコース大学生のための英文法」 利用者：203 名
 - 「基礎からのTOEIC」 利用者：146 名

(2) 2009 年度

- 就職試験対策プログラム E-Testing(コンピュータ)
 - 申込者：661 名 利用者：413 名
- 英単語・漢字トレーニングプログラム モバイル・アカデミー (携帯電話)
 - 申込者：249 名 利用者：240 名
- WebClass (コンピュータ) のコンテンツ
 - 「レポート作成入門」 利用者：184 名
 - 「リメディアルコース大学生のための英文法」 利用者：165 名
 - 「段階的に学べるTOEFL対策」 利用者：160 名
 - 「INFOSS情報倫理」 利用者：936 名

3. 学内組織との連携

(1) キャリア構築支援のための各種企画・説明会

他の組織による企画・説明会等のプレゼンテーションルームでの開催状況は以下のとおり

[2008 年度]

- キャリア・センター主催の1年次と2年次のグループワーク (各2回計4回)
- 外国人留学生特別科目「日本語 (応用)」の授業でのプレゼンテーション
- 学生と教員による研究会等

[2009 年度]

- キャリア・センター主催の1年次と2年次のグループワーク(各2回計4回)
- キャリア・イングリッシュ・アイランドの英語トレーニング
- 学生と教員による研究会等

(2) E-Testing等のコンテンツの提供

- 「2. コンピュータによる自習システム」に記載のとおり、就職試験対策プログラムのE-Testingの提供にあたっては、キャリア・センターと連携し、学生への広報・利用促進をはかり、キャリア構築力の育成をはかる環境を提供している。
- WebClassのコンテンツの提供にあたっては、以下の組織と連携し利用促進をはかっている。

英語のコンテンツ：キャリア・イングリッシュ・アイランド、第一外国語運営委員会

INFOSS情報倫理：情報処理教育運営委員会

なお、視聴覚教育センターのLL教室で提供している「ネットアカデミー」(英語

のネットワーク型学習システム)については、2008年度から図書館における自習も可能とした。

(3) 学内組織との連携等によるコーナーの設置

2008年度後期より、コミュニケーション・オープンスペースに2つのコーナーを設けた。

- キャリア・センターお薦め本コーナー：本学学生のキャリア構築に役立つキャリア関連資料(書籍・雑誌)の配架
- 学生グループ選書コーナー：課外活動を行っている学生グループから企画を募集し、それに合った書籍・資料の購入あるいは寄贈の受入れを行っている。グループの活動内容、各資料についての学生による推薦文と表紙カバーを展示。募集にあたっては、広くHPや館内掲示で広報するとともに、学生生活課や東京女子大学学会の協力を得ている。

4. 初年次学習支援

(1) 基礎的日本語能力養成プログラムによる初年次学習支援

前述の「1. 学習支援プログラム(1)2008年度 b)基礎的日本語能力養成プログラムによる初年次学習支援、および、(2)2009年度 b)基礎的日本語能力養成講習」参照。

(2) ガイダンスによる初年次学習支援

a) 新入生への図書館オリエンテーション

[2009年度](4月7日実施)

6名の学習コンシェルジェがプレゼンテーションルームで簡単な全体説明を行った後、6名のサポーターの学生と館員が館内ツアーに案内した。新入生の参加者数は約670名(同年5月1日現在の1年次学生総数の67.5%)で、学習コンシェルジェの説明は38回であった。

[2010年度](4月6日実施)

5名の学習コンシェルジェ、6名のサポーターによる。新入生の参加者数は約610名(同年5月1日現在の1年次学生総数の62.8%)で、学習コンシェルジェの説明は30回であった。

b) 1年次学生対象のガイダンス

2009年度に実施したガイダンスは、前期38回・後期17回、合計55回であった。その内、1年次学生を対象としたガイダンス(「情報検索」および「基本的なレポートの書き方」)を前期に18回実施した。受講した1年次学生は計488名で、1年次学生総数の49.1%である。(p.24 学習支援プログラム(2)2009年度 a「情報検索」ガイダンスと「基本的なレポートの書き方」ガイダンス、 b基礎的日本語能力養成講習 参照)

現代教養学部人間科学科心理学専攻では必修科目である「1年次演習(心理学)」のシラバスに「図書館ガイダンス(情報・文献検索など)」が組み込まれ、「情報検索」および「基本的なレポートの書き方」ガイダンスを受講させて、スタディ・スキル向上をはかる導入教育として活用している。同学科コミュニケーション専攻におい

ても、必修科目「1年次演習（コミュニケーション）」のシラバスに盛り込み、「情報検索ガイダンス」を活用している。

5. 本プログラムの位置づけの明確化および大学全体の教育への効果

(1) 本プログラムの位置づけ

大学全体の教育方針・目標の中での本プログラムの位置づけは、次のとおりである。

本学は、創立以来、キリスト教に立脚したリベラル・アーツ教育を理念として、生涯にわたって高度な社会貢献と活躍のできる、自立した精神を有する女性の育成を教育目標としてきた。現在は、その伝統を踏まえて、「女性の自己確立とキャリア探求の基礎をつくる」という教育目標を全学的に掲げている。

上記の教育目標のもと、正課教育および正課外教育の双方において、あるいはその連動において、学生の自発性と創造性を育て、大学における学習の充実と生きる力を獲得をする学生支援の取組を行っている。学生一人ひとりが「自己確立とキャリア探求」の基礎をつくるために正課外の取組の一つとして、図書館を学生生活の中心に位置づけ、学生の多様なニーズに的確に対応することにより知力と人間力の育成を促進させる学生支援プログラムを目指している。

(2) 大学全体の教育への効果

第 章、第 章および本章で記載したように様々な支援のプログラムを実施した。

大学入学後における初年次学習の支援、キャリア構築のための情報提供をとおして、学生の様々なニーズに応えるプログラムを実施している。「情報検索」「基本的なレポートの書き方」ガイダンスやWebClassについては、本章の記述のとおり正課教育の一部にも組み入れられ、その効果が期待されている。

【点検・評価、長所・問題点】

1. 学習支援プログラム

(1) 「情報検索」ガイダンスと「基本的なレポートの書き方」ガイダンス

2009年度に見直した結果、利用の促進がはかられた。特に人間科学科心理学専攻やコミュニケーション専攻のように、必修科目の授業でも活用されたことから、内容的にも一定の評価を得ている。

また、学習コンシェルジェが担当したガイダンスは、図書館員が行うガイダンスに比較して学生からの質問が多く出されるなど、双方向的なガイダンスが行われ学生の受け持つガイダンスの効果が示されている。また、学習コンシェルジェのプレゼンテーション能力の育成にもつながっている。

(2) 基礎的日本語能力養成講習

2009年度は専任教員が計画したプログラムで実施した結果、より正課の授業に役立つ内容で実施することができた。

受講学生に実施したアンケートでも、前後期とも、ほぼ全員から満足しているとの回答を得た。前期の1年次を対象とした講習、後期の就職活動を控えた学生に対する講習の双方とも、受講動機は「自分の日本語能力に不安がある」と答えた学生が40%近く

を占めている。参加者の人数（p.25 b基礎的日本語能力養成講習 参照）は決して多いとは言えないが、受講生全員に行き届いた内容の講習が行われた。受講生の満足度も高かったことから受講動機に見合った効果をあげたと言える。

2010年度アンケートの「Q11：学習の際に、次の図書館の設備やサービスが役に立っていると思いますか？」という設問の「ガイダンス・講習」について、80.1%の学生が役立っていると回答している。大学での学習に本プログラムで提供している内容が効果的な影響を与えていると言える。

2. コンピュータによる自習システム

(1) E-Testing

キャリア・センター主催の就職ガイダンスでプログラムの説明を行い、利用を促した結果、利用率（利用者数 / 申込者数）は2008年度の55.0%から2009年度は62.2%と増加した。中でも、40回以上の受験者が50名近くおり、学生の就職活動を支援することができた。

(2) 携帯電話による自習システム（モバイル・アカデミー）

基礎的な日本語能力と英語運用能力を身につけるという目的から、新入生オリエンテーション時に、申込を受付けた。時間と場所を選ぶことなく利用できる形態が、主体的な学習の継続に繋がっている状況が見られたものの利用者は減少している。これは各種の携帯用電子機器（任天堂DS等）の急激な普及や、通信料が個人負担となることが原因と推定され、今後の検証が必要である。

(3) WebClass

WebClassを活用した授業は、2008年度40科目、2009年度47科目。各担当教員が小テストやアンケートをWeb上で課すこと等により、効率的な授業運営が可能になった。「学生からの質問をアンケート機能を利用して行うことにより、学生の理解状況のチェックも可能となった」との感想も教員から寄せられ、教育効果を向上させる一つの手段として活用されている。

また、自習ソフトについては、2009年度から導入した「INFOSS情報倫理」が情報処理教育運営委員会で検討され、正課の授業の1年次必修科目「コンピュータ」で課題として活用された。ネットワーク社会に求められる情報倫理の学習に利用されている。授業の最後に実施したアンケートでは、「情報倫理と安全」について、「理解しやすい」と回答した学生が全体の54.8%、「興味を持てた」が同じく61.5%という結果になり、半数以上の学生が肯定的な評価を示している。さらに2010年度は、シラバスの6回目の授業スケジュールに「情報倫理 WebClass(INFOSS情報倫理)の使い方、ネットワーク社会、セキュリティと個人情報保護、ネットワーク社会と生活、ネットワーク社会の問題とトラブル」というテーマが上げられた。授業後の、課外学習として、学生が各自コンテンツを使って学習を行い、その正答状況については、図書館の管理者権限でデータ抽出を行い、その結果を、各授業担当教員へ報告し、その後の授業に活用することになっている。

情報処理教育運営委員会からは、本コンテンツについて積極的に課外学習での利用を促すことで教育効果を高めることができるとの検討結果が示されている。

2010年度アンケート「Q11：学習の際に、次の図書館の設備やサービスが役に立っていると思いますか？」で、「WebClassのコンテンツやE-Testing等」について81.3%の学生が肯定的回答（「非常にそう思う」から「そう思う」「ややそう思う」まで）を示しており、コンピュータによる自習システムが、学生の学習支援につながっていると言える。

3. 学内組織との連携

上述したように情報処理教育運営委員会(p.26 (2) E-Testing等のコンテンツの提供 参照)、人間科学科心理学専攻・コミュニケーション専攻(p.27 b)1年次学生対象のガイダンス 参照)等、一部ではあるものの本プログラムが正課教育の一部に盛り込まれ実施されている。

学内組織との連携については、事業開始後、キャリア・センターお薦め本コーナーおよび学生グループによる選書コーナーを設置する等拡大に努めている。

しかしながら、まだ一部の組織との連携にとどまっており、学生支援の強化のためにはいっそうの連携が必要と思われる。

4. 初年次学習支援

各学科の1年次必修科目を中心にして初年次教育は既に行われているが、その内容や方法については、学科・専攻の判断に委ねられているというのが現状である。このため、本プログラムの初年次学習支援サービスが全学的に組織だって活用されるまでには至っていない。今後、初年次教育のあり方に関して大学全体で議論をすすめ、本プログラムの位置づけを明確にしていく必要がある。

2010年度アンケート「Q11」を学年別に集計し平均値を出した結果は、表7(p.31)のとおりである。

「学習環境(スペース)、図書・雑誌の所蔵」については学年による差は見られないものの、「学生アシスタントのサポート、ガイダンス・講習、WebClassコンテンツ・E-Testing等」についての1年次の平均値が他の学年に比べて高いことから、学生協働サポート体制とともに、学習支援プログラムおよびコンピュータによる自習システムが初年次学生の学習支援に有効に機能していると言える。

表7「Q11：学習の際に、次の図書館の設備やサービスが役に立っていると思いますか？」

	1年次	2年次	3年次	4年次
学習環境（スペース）	5.46	5.42	5.45	5.48
図書・雑誌の所蔵	5.07	4.90	5.08	5.06
電子ジャーナル、データベース	4.89	4.81	4.90	5.16
学生アシスタントのサポート	4.66	4.25	4.25	3.96
ガイダンス・講習	4.56	4.21	4.27	3.96
WebClassコンテンツ、E-Testing等	4.72	4.43	4.35	4.27
パソコン	5.15	5.07	5.26	5.10
平均値	4.93	4.73	4.79	4.71

注1：上記平均値は、「非常にそう思う」=6点、「そう思う」=5点、
「ややそう思う」=4点、「ややそう思わない」=3点、
「そう思わない」=2点、「非常にそう思わない」=1点として積算した
合計を回答総数で割った値。最高点は6点。

注2：大学院学生の回答数は5と少ないため、省略した。

5. 本プログラムの位置づけの明確化および大学全体の教育への効果

滞在型図書館を目指し学習環境の整備と多様なプログラムを提供してきた。知の拠点となる図書館においてその役割は大きい。

自己点検・評価委員会が毎年実施している在学生（2～4年次学生）対象のアンケート（資料11参照）では、「東京女子大学図書館に満足していますか？」という設問で、「満足している」という肯定的回答（5段階評価：5および4を回答した者）は、2009年度53.5%、2010年度55.2%である。「満足している」という回答は半数をわずかに超えるにとどまっている。また、同委員会の卒業時アンケート（資料10参照）では、「図書館は大学生活に役に立ちましたか？」という設問に対し、役に立ったという肯定的回答（5段階評価：5および4を回答した者）は、82.2%（2009年3月実施）、80.0%（2010年3月実施）である。プログラム開始前のデータがないため、プログラム導入前に入学した卒業生と、プログラムを開始後に入学し在学中の4年間をとおして本プログラムを活用した卒業生との比較は今後の課題となる。また、本プログラムが大学全体の教育にどのような効果をもたらしたかについては、本プログラムのみが与えた影響を分離して測定することは、現時点では行えなかった。したがって、本プログラムの効果の検証は暫定的なものであり、最終的な効果の検証は将来に委ねる。その際、学生アンケートの実施方法だけでなく、正課教育への効果測定方法のしくみも考えていく。

一方、図書館利用学生を対象とした2010年度アンケート「Q8」で、「大学生活（特に学習面）の支援を得る」ことが図書館利用の際に重要であるとの肯定的回答（「非常に重要である」から「重要である」「やや重要である」まで）は、80%に近い。従って、利用学生にとっては図書館は十分に大学生活を支援する場であることがわかる。教員アンケートにおいて、96.8%の教員が図書館を「学生の学習や大学生活を支援している場」になっているとの肯定的回答（「非常にそう思う」から「そう思う」「ややそう思う」まで）を示し、「マイライフ・マイライブラリー」の取組が図書館の機能の充実

につながっている」と感じている教員は 93.2%に達している。これは、前述の「情報検索」や「基本的なレポートの書き方」ガイダンス、WebClassによる効果が一定の評価を得たと言える。

本学の教育目標、また全学的見地から「学習支援」「キャリア支援」を行っていく中で、図書館が果たす役割を明確にする必要がある。

【将来の改善に向けた方策】

学内組織との連携については、大学全体への働きかけが必要と思われる。そのため、学生グループによる選書コーナーに関しては、東京女子大学学会との組織的な連携を探っていく。また、教育コンテンツの共有化等を検討し、視聴覚教育センターや情報処理センターとの連携も強化していく必要がある。なお、その際、コンピュータ自習システムに関しては、情報処理センターの機能との関係で、全学的な見直しも必要である。

初年次学習支援については、今後、大学全体で初年次教育を検討していく中で、図書館における学習支援の位置づけを明確にし、正課教育と連携した形の実施を目指す。そのための方策として以下の事柄があげられる。

「情報検索」「基本的なレポートの書き方」ガイダンス

図書館の果たす役割と図書館での情報検索の重要性に鑑み、人間科学科心理学専攻やコミュニケーション専攻で行った標記ガイダンスについて、教育効果を把握しつつ、他学科・専攻の1年次必修科目で活用するよう働きかけていく。このガイダンスを入学時に実施することにより、卒業までの4年間を通じて図書館サービスを学習に活用することにつながり効果が期待される。

コンピュータによる自習システム

WebClassコンテンツ「INFOSS情報倫理」の授業「コンピュータ」(1年次全員の必修科目)の活用状況については「点検・評価」に記載した。今後、コンテンツの見直しをはかり、他の基礎的授業におけるコンテンツの活用を探り、授業の課外学習における活用拡大をはかっていく必要がある。

モバイルアカデミーの利用が振るわない。E-Testingに関しても、必ずしも高い利用とはなっていない。今後、e-learningをどのように活用していくのかについて、大学全体で検討を行い、採用するシステムやコンテンツを見定めた上で、学習支援プログラムの再構築をはかる必要がある。その際、現在は図書館でマイライフ・マイライブラリーの事業として実施しているが、その体制を今後も維持していくのか、あるいは他の部門への移行が必要なのかについても、更なる検討を行う必要がある。

第 章 学外への公表・普及

到達目標

G P事業の要件である「他大学の参考となる」ために、学外への周知をはかる。

点検・評価項目

学外への広報の実施により、本プログラムが他大学の参考となっているか。

【実施状況】

1. 他大学等からの見学者

[2008年度] 26回受入れ、見学者数合計117名。

[2009年度] 34回受入れ、見学者数合計118名。

[2010年度] (4月～7月) 15回受入れ、見学者数合計69名。

2. 学外での事例報告(講演会等)

[2008年度] 7回、参加者数合計566名

6/13 私立大学図書館協会 東地区部会 研究講演会

9/5 公立大学協会図書館協議会研修会

9/13 三田図書館・情報学会 月例会

10/17 私立短期大学図書館協議会研修会

3/4 平成20年度茨城県図書館協会大学図書館部会研修会

3/13 独立行政法人日本学生支援機構主催 平成20年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」意見交換会における事例紹介

3/18 平成20年国立大学図書館協会地区協会助成事業 東海北陸地区国立大学図書館協会主催『ラーニング・コモンズ』フォーラム

[2009年度] 1回 約900名

1/7 文部科学省主催「大学教育改革プログラム 合同フォーラム」分科会(総合的な学生支援)での事例報告

3. 雑誌への掲載(依頼原稿)

[2008年度]

- NPO 法人大学図書館支援機構『ニュースレター』連載「大学図書館の最前線」への記事掲載。(2008年10月)

- (社)日本図書館協会機関誌『図書館雑誌』11月号「大学特集」への記事掲載。

[2009年度]

- I D E 大学協会『I D E 現代の高等教育』2009年5月号への記事掲載。

- (社)日本私立大学連盟『大学時報』2010年1月号への記事掲載。

4. 報道発表・新聞記事での紹介

[2008年度]

- 2009年3月 文部科学省報道発表

平成19年度「学術情報基盤実態調査」の結果報告について

参考資料「大学図書館や情報関係施設の特色ある取組」紹介

[2009 年度]

- 2009 年 9 月 9 日 『朝日新聞』(朝刊) 28 面「きょういく@東京」

5. 研究者による報告書発表等での紹介

[2008 年度]

- 名古屋大学附属図書館研究年報 2008 年第 7 号
「わが国の大学図書館におけるラーニング・commons の事例研究」

[2009 年度]

- 長崎県立大学 経済学部論集 (2009 年 6 月)
- 北海道情報大学紀要 第 21 巻第 2 号 (2010 年 3 月)

[2010 年度]

- 書籍『学びの空間が大学を変える』(2010 年 5 月出版)
「第 2 部 Part.3 ケーススタディ: マイライフ・マイライブラリー (東京女子大学)」

【点検・評価、長所・問題点】

実施状況に記載のとおり 2010 年 7 月までに 300 名を超える他大学等の図書館関係者を見学者として受入れた。本プログラムの実施状況を実地に紹介し、見学者の質問に応えるとともに、図書館における学生支援のあり方について意見交換を重ねることで、本プログラムを他大学等の参考に供することができた。このことは、見学者に行ったアンケートの回答からもうかがえる。

見学者アンケートは、次の 4 点について自由に感想や意見を求めたものであり、記名は任意とした。

「マイライフ・マイライブラリー」プログラム全体について

本学図書館の新たなフロア構成について

学生協働サポート体制について

その他、参考になったことなど

主なものを以下に列挙すると、

「マイライフ・マイライブラリー」プログラム全体について

- 大学図書館は学生のために存在するということが成功しているプログラムだと感じた。滞在型図書館や学生協働サポート体制など、学生を成長させながら、また図書館も時代に合わせた発展・進化していくことが可能なのだと感じた。
- 図書館独自というよりは、大学の教育理念や目標の延長にあるプログラムであるという印象を持った。学習支援に重要となる学内組織、特に教学との連携が非常にうまくいっているように感じられた。それは、図書館課が教育研究支援部に属しているという、事務組織体制にも関係があるのだろうか。とにかく、ハード面(図書館改修)とソフト面(学生協働サポート体制)が共にうまく噛み合っているプログラムだと思う。

本学図書館の新たなフロア構成について

- 2 階以上については従来のレイアウトを活かしつつ、1 階部分を学生中心の滞在型のゾーニングにしたことで、図書館全体のイメージや機能を刷新し、新しい「図書館の顔」を打ち出すことに成功していると思う。「ラーニング・commons」と

しての図書館像を模索している国内他の図書館にも非常に大きな示唆を与える事例だと思う。

- 一階部分に学生達を引きつける施設を作り、そこから本来の図書館設備への誘導に成功している点に興味深く拝見した。結局学生達が図書館に求めるものは従来の図書館資料であることに今も昔も大きな変わりはない。それを学生達に気がつかせることに成功していると思う。

学生協働サポート体制について

- 学生が自ら図書館側に立ってサービスを提供することで、大学図書館はより身近な存在となり、勉学の面でも積極性が増すことになる。これからの大学図書館に求められる一つの方向性であると感じた。
- 学習コンシェルジェがガイダンスを行うことは大学院生にとっての自己研鑽になるだけでなく、受講する学生も先輩の話として訊きやすい。良い学習支援になると思った。また、システムサポーターが利用者向けのQ&Aやマニュアル作成に取り組むなど、学生の視点を活かして協働していると思った。
- 学生を図書館の学習支援に活用する体制、学生のモチベーションに配慮した仕組みづくりなどとても参考になった。業務の異なる学生アシスタントを一同に集めて意見交換するなど、「学生の成長」を重視した体制づくりに共感した。サポート体制を維持するためには、職員側の業務負担もあるだろうが、補ってあまりある取り組みではないかと思う。

その他、参考になったことなど

- コミュニケーションスペースやリフレッシュルームなどの空間が、今まで図書館に来ることのなかった学生に足を運ばせるきっかけになっている。また、新たな図書との出会いを提案したい、本来の図書館としての利用もしてほしいという図書館職員の方々の思いから、さまざまな工夫がされている。大学図書館の職員としてあきらめてはいけないことだと教えていただいたように思う。
- キャンパス全体がとてもよい環境にあると思った。その中での図書館の位置や役割が積極的に構想されていた。よい教育環境であることをうらやましく思った。全国の大学のよい手本として、もっと知られるとよいと思う。

また、本学が行った学外での事例報告は計8回、雑誌掲載は計4回、新聞報道1回、書籍での事例紹介(1章分)1回と、学外での事例紹介の機会にも恵まれ、本プログラムの公表・普及を十分にはかることができた。

【将来の改善に向けた方策】

GP事業としての公表・普及については、十分その使命を果たしていると考えます。今後は、広報課と連携をとりながら、大学全体の教育目標とともに、そこでの本プログラムの位置付けを明確にして社会に発信していく必要がある。これにより、本学の教育目標と本プログラムへの理解をよりいっそう深めることが可能となる。

「マイライフ・マイライブラリー」自己点検・評価

評価資料一覧

資料1：図書館フロア図（改修前／改修後）

資料2：図書館1階フロア写真（改修前／改修後）

資料3：図書館2階エレベータ脇フロア写真（改修前／改修後）

資料4：利用統計（2008年度／2009年度）

資料5：2008年度「マイライフ・マイライブラリー」アンケート 集計結果（2009年1月実施）

（本文中では「2008年度アンケート」とする）

資料6：2009年度「マイライフ・マイライブラリー」アンケート 集計結果（2010年1月実施）

（本文中では「2009年度アンケート」とする）

資料7：2010年度「マイライフ・マイライブラリー」自己点検・評価アンケート集計結果

（本文中では「2010年度アンケート」とする）（2010年6月実施）

資料8：2010年度「マイライフ・マイライブラリー」教員アンケート集計結果（2010年6月実施）

（本文中では「教員アンケート」とする）

資料9：2010年度「マイライフ・マイライブラリー」ガイダンスに関するアンケート集計結果

（2010年6月実施）

資料10：自己点検・評価委員会による卒業時アンケート 集計結果

（2008年3月／2009年3月／2010年3月実施）

資料11：自己点検・評価委員会による在学学生アンケート 集計結果

（2009年4月実施／2010年4月実施）

【以下は参考資料】

（逸村委員長へのみ送付します。他の委員の方は、必要な資料があれば事務局までお申し出ください。）

資料A：2006年度図書館委員会資料「図書館1階改修計画案」

資料B：文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」事例集より

「マイライフ・マイライブラリー」の事例紹介（抜粋）

資料C：学生アシスタントの活動成果物

ボランティア・スタッフによる「図書館だより」 2008年度(3部) 2009年度(2部)

システム・サポーターによる「PC質問箱」(Q&A集)

資料D: 学生アシスタントのアンケート結果(2008年度、2009年度)

資料E: 学生アシスタントのミーティング記録(2008年度、2009年度)

全体ミーティング

業務別ミーティング(アシスタント毎)

資料F: 2009年度 基礎的日本語能力養成講習の実施状況・参加者数・アンケート結果

資料G: 2009年度ガイダンスの実施状況・参加者数・アンケート結果

資料H: 他大学等からの見学者

見学者受入れ一覧(2008年度、2009年度、2010年度4月~7月)

見学者アンケート回答(2008年度、2009年度、2010年度4月~7月)

資料I: 雑誌、新聞等への掲載

雑誌への掲載(依頼原稿)

NPO法人大学図書館支援機構『ニュースレター』連載「大学図書館最前線」

(社)日本図書館協会機関誌『図書館雑誌』2008年11月号

IDE大学協会『IDE現代の高等教育』2009年5月号

(社)日本私立大学連盟『大学時報』2010年1月号

報道発表・新聞記事

平成21年3月 文部科学省報道発表での紹介

(平成19年度「学術情報基盤実態調査」の結果報告について

参考資料『大学図書館や情報関係施設の特色ある取組』で紹介)

2009年9月9日 『朝日新聞』掲載

研究者による報告書発表等での紹介

2008年 『名古屋大学附属図書館研究年報』

2009年 『長崎県立大学経済学部論集』

(一部名称等の誤りがあり、修正を依頼し了解・修正済み。)

2010年 『北海道情報大学紀要』

(一部名称等の誤りがあり、修正を依頼。明らかな字句の誤りは修正済み。)

2010年5月出版 書籍『学びの空間が大学を変える』第2部 Part.3